

# 藝文

第貳拾壹年第七號

## 和讀の漢字音

大島正健

漢字には其原音を訛り傳へられたる、和讀なりと思はるゝ者あり。筆者の記憶し居る者の中より取り出だして、左に其數例を擧ぐ。

眠。説文に目に從ふ、民の聲とあるを見れば、我方にて之をミンの音に呼ぶこと、或は古音を傳へ來れるには非ざるかと思はるゝ疑無きに非ず。然るに此字唐韻英賢反、今音 *min* にて、後漢の頃既にメンの音と爲り居りたるなり。其以前の古音にては、眠は其聲符の民と共に *min* の音にてありたるものゝ如し。六朝の中期以後、民は今音と同じき、ミンの音に移りたるが如く思はるゝが、此時代に在りては、眠は既にメンの音と爲り居りたれば、民と眠とは其所屬の韻を異にし、全く別音と爲れり。眠は先の韻に屬するに、我方にて、其のメンなるべきを、ミンと呼び來れること、

然るべき根據無きに似たり。易林節用に、人名の李龍眠にリリヨウメンの假名を附し、又佛家にては、寺院の一室の眠藏を、メンザウの讀聲にて傳へ來る。是れ眠の本音なり。

便。廣韻婢面切にして、我方ベンの音なり。然るに古くより、音便をオンピン、便船をビンセンなど、唱へ、今も尙郵便をイウピンと稱し、便をピンの音に呼び慣はすこと如何ん。察するに是は原音のピエンを、訛り傳へたるものなるべし。

員。唐韻于權反にして、之に對する我假名は、エンなるべきこと、之を聲符とせる、圓のエンなるを見ても、容易く察し得べし。員をキンと呼ぶこと、何に據りたるべきか。

員の古音はヨエンに合口のウの添はりたるものなりしが如し。其のエンと爲りて、後の先の韻と爲るべき韻に移りたるは、後漢の中期以後の事なり。員は又其古音を傳へて、稍其聲を轉じ、文問の韻にも入る。僂員の名をゴウンと呼び慣はせるも、其轉音を示すものなり。是れヲ、ヨンの類よりヲ、ウンに移り、更に又ウンと爲りたるなり。此間の轉聲に、我等の祖先の耳には、キンにきこえたることありたるものと見え、漢音阿彌陀經には、云雲にキンの假名を附するを常とせり。員をキンと呼ぶも、同様の關係ありたるに、起因するものか、されど云雲のキンは、員のキンの如

く常呼ならず。

院。説文、阜に從ふ、完の聲なり。唐韻于眷反にして、我假名エンに當る。然るに之をキ  
ンと呼び慣はし來る。是亦其理由を發見すること能はず。院の古音はワンなり。  
此字今霰の韻に屬す。

寸。唐韻倉困反なれば、之に對しては、ソンの假名を當つべきなり。萬葉集にも、寸をス  
の假名に用ゐたる例あれば、古くより寸は常呼の如く、ソンの音に用ゐ來りたれど、  
是は訛り傳へられるものなるべし。寸を聲符とする村尊の、ソンの音なるを以て  
之を悟るべし。村度も亦ソんタクにして、スンタクに非ず。

左に誤讀の明かなる者、數例を擧ぐ。

輸。廣韻式朱切にして、我音シユに當る。然るに我常呼は之をユと爲す。輸出、輸入、輸  
贏は、シユシユツ、シユニフ、シユエイなれど、ユシユツ、ユニフ、ユエイと呼ぶこと、既に  
一般に行はれて、今改め難し。

較。説文、較に同じ。較は車騎上の曲鈎なり、車に從ふ、爻の聲。唐韻古岳反にして、我音  
カクなり。是れ爻又交の音を入聲に移して、覺の音に用ゐたるなり。此字又校に  
通じて、比較の較と爲る。然るときは廣韻古考切にして、我方漢音カウ吳音ケウ、現

代支那音も、上聲にして入聲に用ゐず。朝鮮音もキヨウなり。之をカクと讀むは、全く誤なり。カクと讀めば、車の横木と爲る。比較は漢音ヒカウにて、ヒカクに非すと知るべし。

暴、暴露の義のときは、入聲にて曝。瀑と共に屋の韻に屬す。故に三字皆ボクと讀み、常呼の如く、バクと讀むは非なり。但し、爆撮は覺の韻に屬するが故、バクと讀むべし。耗、此字秬と同じ。説文、秬は稻の屬、禾に従ふ、毛の聲、唐韻呼到反なり。耗、秬は減の義に假借し、去聲にてカウの音なり。故に消耗品は、セウカウヒンにして、セウマウヒンに非ず。耗の平聲に、マウの音無きには非ざれど、用處同じからず。

攪、説文、亂なり、手に従ふ、覺の聲。唐韻古巧反にして、漢音カウなり。普通行はるゝ所のカクは、旁の覺に由りたる俗讀なり。攪にはカクの音無し。覺の去聲にはカウの音あり。是れ攪の覺の聲なる理由なり。

滌、洗滌の滌なり。唐韻徒歷反にして、狄の音なり。近來醫學界などにては、洗滌をセシデウと呼ぶこと、流行するものゝ如し。滌にデウの音無きには非ざれど、洗滌の滌は、入聲に用ゐらるゝこと、證例ありて動かす可からず。

我常呼の字音より推して、容易く其原字を探り得ざる者あり。左に其三例を出だ

す。

石量なり、十斗を名づけて石と曰ふ。石は唐韻常隻反にして、其音碩なり。我方漢音セキ吳音ジャクなり。然るに其れにも拘はらず、何時の頃よりか、之をコクと呼び慣はせり。石のセキ又ジャクより、コクに轉じたる例無し。故に其音の出處を知るに苦しむ。別に斛の字あり、説文、斗に従ふ、角の聲なり。角の古音は穀なり。斛は十斗なり。因つて知る、石のコクは斛のコクを假借したるを。

反、町の十分の一、畝の十倍なり。此字をタンと呼べど、反は漢音ハン吳音ホンにして、之にタンの音無し。反は段の草體の誤なりと云ふ。ふゑの類の崩れて反に誤りたるものなるべし。

説文に段は段に従ふ。耑の省聲にして、物を推するなりとあり。是れ段の本義なり。鍛は此義より出づ。段に又分割の義ありて、種々の義に用ゐらる。其一義として我方にては、之にキダの訓を施す。區分の義と關係する所あるか、段は又布帛に用ゐる稱呼と爲る。帛二を綱と曰ひ、分つて開かざるを匹と曰ひ、既に開きたるを段と曰ふとあり。後漢の張衡が四愁の詩の一に、美人贈我錦繡段、以何報之青玉案とありて、段は段物の義に用ゐられたり。

段の扁を省聲とする、本音の端の字には、同音にして異義ある者ありて、之に扁を附して、端端端の如く分つ。端と端とは同音同義にして、其一義又布帛の長さの稱に用ゐらる。小爾雅に、丈を倍する之を端と曰ひ、端を倍する之を兩と曰ひ、兩を倍する之を疋と曰ふとあり。されば段端共に布帛の長さを量るに用ゐられ、其音其義共に相通じ居りたるものゝ如し。但し作字としては、段は端の後出にして、其音を假借したるなり。兩字其義に於いて、様々の變化あるも、端は段の古態なることを争ふべからず。意ふに始に布帛の義を有する、タンと言ふ音の語ありて、先づ之に端の字を當て、後更に段の字を當てたるものなるべし。丘を端の略なりと云ふに至りては、甚だ其解に苦しみしが、今小篆を見るに、端は耑にして、上は物の生長する形、一は地の線、下は根なり。即ち耑又端に、物の生長のハジメの義あるなり。端は其地上の部分のみを存じて、地下の根を省けば、即ち丘と爲るなり。言海には、段を地積、端を布帛の用に分ちてあれど、本來此別無く、布帛の長さを量ることより、地積を量ることに移りたるなり。

惣我國にて人名などには、ソウの音として、廣く用ゐらるゝ字なり。總の變形として、字典などにも見ゆれど、古書には此字無し。現代式の説明を下せば、物質界と精神

界とを、綜合する總の意なりなど、言ひ得可けれど、先人には此の如き思想のありたるべきに非ず。又總と惣とは、其音に於いても何の關係も無し。總の音は函に基く。函はマドなり、其中の夕は杵なり。之を窗にも作る。恩は急遽なり。函の明かにして、外を見る心の急はしきなりと云ふ。函は略して匆に作り、随つて恩は忽とも爲る。恩々又忽々は忙はしきを云ふ。是亦略して、函々又匆々と爲る。窓又窓は函の俗字なり。之を窓にも作り、總は總とも書す。總は總と爲り、又惣にも通ふ。惣は惣の形と爲り、其れより誤りて、惣と爲りたるものなるべしと云ふ。訛音の如く見えて、却て古音を傳ふる者あり。左に其二例を示す。

宗、祖宗の宗にして、唐韻作冬反 *tsong*。漢音ソウ、吳音ス、官話 *tsung* なり。宗は韻鏡にては、第二轉の一等韻に屬して、唐韻と同音なり。故にソウ即ちソングの音なり。然るに我方にては、古來宗にはシユウの音あり、即ち宗旨、宗徒、宗派、宗門のシユウの如し。今此字に此音無しといへども、佛教渡來の頃、及び其以前には、廣く用ゐ居られたる、吳音にして、即ち古音なりしなるべし。崇の字あり、説文、山に従ふ、宗の聲なり。崇は廣韻鈕弓切 *dzung*。韻鏡にても、第一轉の二等韻にして之に同じ。漢音はシユウ、吳音はシユなり。之を略して、スウ又スの音にも用ゐらる。此崇の音より

推して、宗にシユウの古音ありたるを察し得べし。楊雄が兗州牧箴に、忠と宗と押韻したる例あり、以て参照とすべし。

喫。喫烟喫茶を、キツエン、キツチャと稱するが如く、喫は我常呼にては、キツの音なり。

然るに此字唐韻苦擊反にして、ケキの音に當る。他の韻書の反切も、概して之に同じ。右の呼法に従ふときは、我呼法明かに誤讀と爲るべけれど、之をキツと讀むこと、亦其根據無きに非ず。故に我方の音誤なるか、或は彼方の音正しきか、其當否を定めんと欲せば、宜しく先づ兩音の由來を探るべし。

喫は説文に食なり、口に從ふ契の聲なりとあり。契は約なり、大切に從ふ、唐韻苦計反、契と同音にしてケイなり、切亦聲なり。契は艱苦の義のときは、廣韻苦結切にして、ケツの音なり。又集韻に欺訖切乞の音ありて、國號契丹をキツタンと稱す。切は説文巧切なり、刀に從ふ、丰の聲なり、切は彫る義なり、竹木を刻畫して、事を記するものに象る。唐韻恪八反にして、其音カツなり。之に大を添ふれば、則ち契と爲る。切を聲符として生じたる、契には、去聲入聲其義を異にして、各ケイとケツとの兩音あり。齧潔は共にケツの音なること、人の知るが如し。切は既に丰の聲に從ふとあり。丰は説文に草蔡にして、草生の散亂するに象るとあり。其音は唐韻古拜



反カイにして、音義共に芥と相通す。

右の諸字の音を考ふるに、丰は其根本の聲にして、刼の聲之に従ふ。此類の去聲は、カイ、ケイの音にして、入聲はカツ、ケツ、キツの音なり。是皆舌韻に屬する字なり。古韻にては、去聲と入聲と相往來すること常なり。問題の喫は契の聲なり。契は其入聲にケツ、キツの音あること前述の如し。喫は魏志劉芥傳に吃に作る。亦以て喫と吃と通ひ居るたるを知るべし。但し其當時の兩字の音は、未だ今音の如く、キツと響き居らざりしことを注意し置くべし。

然らば何故に唐韻にては、喫は苦擊反燉の音に變はり來りしか、是亦説明を要する所なり。六朝の中期の頃、去聲にて霽の韻現出せしとき、之を組成せし者は、喉舌兩韻の混合の字なり。入聲にては兩類混合せずして別韻を爲し、去聲の中、其本質の喉韻に屬したりし者に對する、其同族字は、錫の韻に入り、其本質の舌韻に屬したりし者に對する、其同族字は、屑の韻に入るを定則とせり。繫、髻、麗は霽の韻に屬して、之に對する擊、惕、辟、鄺は錫の韻に屬し、又髻、砌、洩、戾は霽の韻に屬して、之に對する結、切、鏡、振は屑の韻に屬するが如し。然るに本來喉舌の兩韻に屬し居りたる者の混合して霽の韻を組成したるに由り、中には他に化せられて、其本質を變へたる

者あり。契は元來祭の韻に屬し、其同族字の喫と同じく、舌韻に屬したるべきこと  
 正當なるが、祭の韻より霽の韻に轉入するに當りて、いつしか喉韻に化せられ、之と  
 共に喫は祭の韻の入聲なる薛の韻より屑の韻に移らずして、喉韻に轉じて、ケキの  
 音と爲りて、錫の韻に入りたるなり。

右の道理に由り、喫烟喫茶は、キツエン、キツチャと呼ぶこと、却て唐以前の古音に叶  
 ひ、今更特に之を其變態音なる、ケキエン、ケキチャに改むる要を見ざるなり。